

ており、今の定期試験のようなものであろう。学年試験は、1科目30点以上、総平均60点以上となっている。第5章(第27条～第32条)では、入学料・授業料・実地修練費となっており、入学金が2円と定められ、授業料は1カ月1円50銭とし、実地修練費は消耗品等の費用相当額を徴収するとなっている。第6章(第33条～第50条)では、学院生の順守すべき事柄について詳細に記述されている。第7章(第51条～第53条)では、罰則について記載されている。最後に付則1条となっている。この規則は、開校時に比べて整備され、体裁も整い実情に合わせるようになった。

3) 明治28年の学院規則

明治28年4月に血脇守之助が、歯科医術開業試験に合格し幹事に任命された。学院の新体制を築くとの観点から、同年6月に第1回卒業式を行なった。同年4月に発行された「高山歯科医学院の過去及現在の状況」は22章にわたり、当時の学院学則を含め当時の状況が書かれている。学科課程、終業年限、生徒心得、罰則は変更はない。変更された部分を列記してみると、学年の開始時期が毎年9月1日で翌年6月30日に終了、授業は月曜日から金曜日まで午後2時から午後7時に行ない座学のないときは実地練習を行なう。また実地は日曜日の午前中に実地練習を行なう。入学年齢は、一般通学教育を受けた15歳以上の者となり、年齢がさらに1歳下がった。学費についても入学料、授業料はかわらないが、実地練習費10銭、食費3円内外、舎費30銭、実地練習科入学料1円、実地練習科授業料50銭である。また、授業料及実地練習費は12月及1月は半額である。学年は9月から翌年6月なので7月、8月は徴収しなかったと思われる。寄宿舎規則も整備され、25条にわたって細かく定められている。

9) パレ全集にみられる狂犬病の記述

Description about Rabies Appeared in the Complete Works of Ambroise Paré

東京都立駒込病院 高山 直秀

Naohide Takayama, Tokyo Metropolitan Komagome Hospital

近代外科学の父といわれるフランスの外科医、

アンブロワズ・パレ(1510～1590)の著作集であるパレ全集(Les Œuvres d'Ambroise Paré)には現在の「外科」の分野からは離れた領域の記述がみられる。すでにパレ全集中の歯科口腔病医学に関する記述は本学会でも紹介した。本書では哺乳動物や爬虫類などによる咬傷についても記されており、この中に狂犬病に関する記述もみられる。

狂犬病は特異な臨床像と高い死亡率のため古代から恐れられていた病気であるとともに、代表的な人獣共通感染症として知られている。すでに4,000年以上も前のエジプトの法律中に狂犬病に関する記述がみられ、古代ギリシャやローマの医師や科学者が狂犬病について書き記し、日本でも医心方の中に狂犬病の記事をみることができる。しかし、狂犬病は当初限られた地域の野生動物の間でみられ、人間社会では散発的に発生していたにすぎなかったと考えられる。ヨーロッパで狂犬病の発生が流行の形を取り始めるのは、人口やイヌの数が増加し始めた13世紀後半以降のことであり、日本では江戸時代中期以降である。パレが生きた16世紀はヨーロッパで狂犬病の流行が南の地方から北欧へと拡大していた時期である。同じ時期ヨーロッパで流行の拡大を続けていた梅毒とは、犠牲者の社会的背景が異なるが、当時の外科医にとってはともに重大な問題であったと推定される。

「第1の書 外科概論」から始まるパレ全集、第12版(1664年、リヨン刊：日本大学松戸歯学部谷津教授蔵)では、「第19の書 梅毒」、「第20の書 天然痘、麻疹、癩」に続いて「第21の書」に「狂犬、その他による咬傷、刺傷」という表題がみられる。さらに第21の書の中には下記のような章題が記されている。

第21の書

第16章 イヌが他の動物よりも狂犬病に罹りやすい理由

第17章 イヌが狂犬病であることを知るための兆候

第18章 ヒトが狂犬病のイヌに咬まれたことを知るための兆候

第19章 狂犬病のイヌのウイルスが神聖な部位を侵し始めた人々に起こる障害

第20章 予後

第21章 狂犬病のイヌによる咬傷の治療

第22章 すでに恐水病になった人々の治療

第2次世界大戦後の混乱期には日本でも多数発生していた狂犬病も昭和25年の狂犬病予防法制定以降なされた強力な撲滅運動によって昭和31年を最後に国内発生例はゼロとなった。それから約40年が経過し、狂犬病の記憶は日本人からほとんど消失してしまっていたが、現在でも狂犬病は世界各地で発生している。

今回は16世紀のアンプロワズ・パレによる狂犬病の記載を現代の知見と比較して紹介したい。

10) 解体新書とパレ解剖図

The Kaitai Shinsho (1774), Anatomical Book by Genpaku Sugita et al. and the Anatomical Figures (1575) by Ambroise Paré

北九州市 ○上瀧口 武
金子 義郎
九州歯科大学 嶋村 昭辰

Takeshi Kamigataguchi and Yoshiro Kaneko, Kitakyushu City
Akitatsu Shimamura, Kyushu Dental College

解体新書

明和八年千住骨ヶ原における腑分の際、前野良沢が懐中から取り出した一冊の蘭書は、杉田玄白も最近入手した「ターヘル・アナトミア」と同じオランダの解剖書であった。このことは玄白の「蘭学事始」にあり、広く知られていることである。

それより良沢の家に集まった同志によってこの本の翻訳に取りかかった、といわれる。ところが、この名前の本はなく、クルムスの「解剖図譜」であることが、「解体新書」の凡例に説明してある。さらに翻訳に大変苦心して出来上がった「解体新書」はクルムスの書物ばかりではなかった。

凡例には採用した図をとった本の書目をあげると、カスパルの解体書を含め六冊の書物の書名が上げられており、それぞれの書目のうえに篆字が符号として付けられ、書物の引用図の符号と照合出来るようになっている。この六冊のなかに安武児（アンプル）外科書／解体篇／中津侍医前野良沢所蔵／がある。これはフランスの外科医アンプロワ・パレの「外科全集」の解剖篇のことである。

ところが「解体新書」の図中にはパレの書目に付けられた篆字の符号は見当たらず、またパレの図の引用されたものもない。この謎ともいえる事例を解説したものは見当たらない。

紅夷外科宗伝

パレを原本とされる榎林鎮山の著書「紅夷外科宗伝」は、現在では必ずしもパレばかりでは無いと知られているが、そのなかに特異な格好の骨格図が見られる。その原本である1649年刊の蘭訳パレ「外科全集」は見ることが出来なかったが、同時代に輸入された1627年刊平戸藩蔵書パレ「外科全集」にその図を認めることが出来た。図はシャベルを持った骨格図であり、この特異な構図は榎林鎮山に強い印象を与えたとみえ「紅夷外科宗伝」のなかにこの図を写し、その後、この書に極似したオランダ外科書（図）があるが、それらの一つに伊良子光頭の「外科訓蒙図彙」があり、その中に稚拙な同図が見られる。全身骨格がシャベルを持っているという特異の構図のために採り上げられたとみられる。

かようにパレの解剖図の採用を記した「解体新書」に見られなかったパレの骨格図が鎮山をはじめとするオランダ外科図に遺されているのを見ることが出来る。

重訂解体新書

解体新書から50年ほど後に、大槻玄沢により改訂された「重訂解体新書」にはパレの構図と同じ骨格の図があり、全く同じ物といってよい程の図が裏版で採用されている。ところがこの書の凡例にはパレの書目は記載されていない。「重訂解体新書」は、大槻玄沢が師の杉田玄白の命により「解体新書」の原典であるクルムスの「解剖図譜」を翻訳、重訂したものであるが、参考文献書目にはパレの名前はなく、歇鞞力烏斯（ベザリウス）の名前がある。ところがベザリウスの解剖書「ファブリカ」のなかにこの骨格図がみられる。

ベザリウスは、パレと同時代のフランスの有名な近代解剖学の父といわれる解剖学者であるが、その解剖書「ファブリカ」の蘭訳本は、わが国にも早くから知られていて、大槻玄沢は重訂版に参考書の一つにしたとみえる。

パレの「外科全集」は近代外科の祖といわれる書物で、英、蘭各国語に翻訳されているが、その中の解剖図はベザリウスの図を流用したとしたこ